

横浜市 歴史博物館 NEWS 37 2014・9

- ◇企画展「大おにぎり展」によせて
- ◇大塚・歳勝土遺跡公園の保存と活用について
- ◇報告「佐久間象山書道展」
- ◇企画展「蒔田の吉良氏―戦国まぼろしの蒔田城と姫君―」をふりかえって
創作歴史紙芝居「蒔田城さき姫ものがたり」の上演
- ◇横浜市歴史博物館「民俗に親しむ会」と「鶴見川流域のくらし」展(仮称)
- ◇くちよいとミュージアムショップたいむ>あじろ編みバッグキット
- ◇都筑区制20周年記念 特別企画展
- ◇ボランティア活動紹介 遺物洗浄
- ◇神奈川フィルハーモニーのコンサート
- ◇<知ってますか?>横浜市歴史博物館では「博物館デビュー支援事業」をすすめています。



古墳時代の黒こげおにぎり?

企画展「大おにぎり展」によせて

歴史博物館の屋上に田んぼがあるのをご覧になりましたか？ ちょうど常設展示室の真上にあたるところに、テンバコ二つ分の小さな田んぼを作っています。六月半ばに田植えを行い（実は苗代の段階で一回枯らしてしまつたので二回目の挑戦でした）、この原稿を書いている八月半ばに穂が出て花が咲き始めたところです。九月の終わるか一〇月初め頃に刈り入れの時期を迎えそうです。

皆さまもご存じのように、この屋上から左手の陸橋を渡ると大塚・歳勝土遺跡公園に行くことができます。大塚・歳勝土



歴史博物館屋上の田んぼ（7月末撮影）

遺跡では一九七〇年代の発掘調査で弥生時代中期後半の環壕集落と方形周溝墓群が見つかりました。これに水田跡が加わると弥生時代を説明する上では非常に都合がよいわけですが、残念ながら見つからず、横浜市区では弥生時代の水田跡の発見例そのものがまだないのです。昔の水田面がその後の時代に削られてしまったのでしょうか？あるいはまだ発掘していない地点に埋もれているのでしょうか？なかなか興味深い問題ですが、現時点では「わからない」としか答えようがありません。

このように水田そのものは見つかっていませんが、大塚遺跡からは炭化米や籾の圧痕が残された土器が見つかったおり、コメ作りが行われていたことは確実です。このような炭化種子や土器圧痕は一見して目立つ資料ではありませんが、当時の生活を知る上では非常に重要な意味があるのです。この秋の企画展では、このような一見地味な資料を集めて展示する予定です。いきなり屋上で田んぼなどを作り始めたのも、実はこの企画展の準備のためののです。

企画展「大おにぎり展」出土資料からみた穀物の歴史は、遺跡から出土した資料を手がかりとして、日本列島におけるおにぎりの歴史を探ろうという展示で

す。表紙写真の北川表の上遺跡から出土した炭化米塊をはじめ、青森から九州までの各地から出土した炭化米塊を集めて展示します。炭化米塊というのは、焼けて炭になったお米の塊です。ただし一般に「炭化米塊」とされる中には、稲穂・籾・玄米・ご飯などさまざまな状態のお米が焼けてかたまつたものがあります。調理されている場合は「おにぎり状」と言われたりしますが、この場合も本当に「握り飯」だったのかどうかの判断は難しいことが多いのです。一体どのような点に注目すれば「おにぎり」だといえるのか、そんなところもご紹介しながら、皆さまと一緒に資料を見て考えていただければと思います。さらに「おにぎり」を切り口にして、米の食べ方の歴史、さらにお米に限らない植物性食物の利用の歴史についても取り上げます。

現在は企画展に向け、いろいろな実験も行っています。普段は復元縄文土器を作っている横浜縄文土器作りの会の皆さんに依頼して、北川表の上遺跡から出土した古墳時代の土器をモデルにして、長胴甕と甑を作ってもらいました。これらは竈にかけてお米を蒸すのに使われる道具です。秋の展示期間中には、遺跡公園で「実験！古代のご飯を食べよう」というイベントを実施します。その時には、弥生時代と古墳時代の土器で調理したご飯



調理実験の様子（8月上旬撮影）

を食べ比べてもらいたいと考えています。どういってお米をどのように調理すると美味しく食べられるのか、試行錯誤しているところです。

植物質の遺物は、考古資料の中でも土器や石器などと比べて残りにくいのですが、発掘技術や分析技術の進歩により、近年の研究の進展は目覚ましいものがあります。今回の展示では、そのような最新の植物考古学の研究成果の一端をご紹介します。

（高橋 健）

大塚・歳勝土遺跡公園の保存と活用について

横浜市歴史博物館が平成七年一月三十一日に開館した後、平成八年三月二三日に国指定史跡大塚・歳勝土遺跡の保存と活用を目的とした大塚・歳勝土遺跡公園（以下、公園）が一般公開されました。

公園は、弥生時代中期の環濠集落である大塚遺跡の三分の一と、同じ時期の墓域である歳勝土遺跡を土中に保存し、原則発掘調査で見つかった場所と同じ位置に、竪穴住居や方形周溝墓などの遺構を復元しています（それぞれの遺跡の詳細については当館の常設展示室および公園を是非ご見学ください）。大塚遺跡内に復元した遺構は、集落を巡る環濠・土塁・木柵列、当時の住居跡である半地下式の竪穴住居七棟、倉庫と考えられる高床建物一棟であり、発掘調査時の竪穴住居の様子を復元した型取り復元住居一軒になります。復元していない竪穴住居は発見された場所の外周にコンクリートブロックを埋め込むことによって位置を示しています。歳勝土遺跡は方形周溝墓五基を復元し、そのほかの方形周溝墓はコンクリートブロックによる表示を行っています。また、遺跡公園内には各種説明板や体験学習を開催できる工房を設置しており、公園自体が大塚・歳勝土遺跡に関する野外展示になっています。

公園は平成二六年三月に、開園から一八年を迎えました。当初は大人の背丈程度だった植栽も見上げるまでに大きくなり、時間の経過を感じるとともに公園内の説明板や復元建物などの劣化も目立ってきました。これまで、劣化した施設は部分ごととに修繕を行っていました。が、平成二五年の末から平成二六年の三月までの間に、復元竪穴住居二棟や復元高床建物一棟の全体的な茅の葺き替え、建材の交換などをとまなう、公園内施設の大規模な修繕を行いました。この中には長年の懸案であった公園入口の港北ニュータウンの歴史を記した説明板と大塚・歳勝土遺跡を題材にした漫画の修繕も含んでいます。しかし、修繕は施設全体に及ぶものではなく、今後も継続して全体の劣化状況を確認しながら計画を立て、実行することで史跡の保存が適正に行われるものと考えています。

開園当初、授業の一環で公園を見学した小学生は既に成人を超えています。が、小学校六年生が中心の学校見学は現在も引き続き行っています。来られた方のうち希望者に対してはガイドボランティアが約一時間かけて大塚・歳勝土遺跡の解説を行っています。公園の見学は史跡活用の大きな柱ですが、そのほかの活用のありかたとして、ゴールデン

ウィークに公園内で弓矢打ちや火起こしなど、弥生時代の人々の生活の一端を現代風にアレンジした体験ができる「大塚遺跡まつり」、復元竪穴住居で一晩を明かす「竪穴住居に泊まるう」、年間を通じて公園内の工房で行う「体験学習」があります。体験学習は、横浜市や周辺地域の歴史に関係したことが行われます。今年の夏休みは、横浜の土偶・万祝染・蘭細工・縄文ポシェット・勾玉作りを開催し、盛況の内に終了しました。また、横浜の土偶など、粘土で作成した土製品や土器は公園内の一角で野焼きを行い完成させます。

他団体との共催を行うことで公園の活用を行うことがあります。ちょうど今号の刊行時に開催中のものとして、都筑アートプロジェクトとの共催で、大塚遺跡内でさまざまな展示やワークショップが行われます（平成二六年一〇月一九日）。

公園の保存と活用を円滑に行い、大塚・歳勝土遺跡に対する市民の皆さんへの理解を深めることができるよう、日々の活動を行っていますので、ご協力お願いいたします。

（橋口 豊）



修繕した復元竪穴住居

報告「佐久間象山書道展」

当館では、平成二六年五月三十一日(土)

七月六日(日)に特別展「佐久間象山と横浜―海防、開港、そして人間・象山―」を開催しました。この特別展と同時開催した当館初の書道展が、「佐久間象山書道展」です。特別展の主役・佐久間象山(しよざん・ぞうざん)は、書に親しみ、多くの作品を残しています。その象山に関する言葉を表現することを通じて、多くの方に象山や特別展に興味を持っていただきたいと考え、企画しました。作品は半紙に縦書きとし、次の二つの



展示風景。右側が「理事長賞」「館長賞」「ユニーク賞」、左側が「佐久間象山大賞」、ご応募いただいた全作品。

課題を設けました。

①「象山」…じつは、実名ではなく号。象山の出身地・松代(長野県長野市)の同名の山からとつたともいわれます。

②「海舟書屋」…象山の門弟で義理の兄でもある勝海舟は、この言葉が書かれた額を象山から譲り受け、ここから「海舟」の号をとつたといわれます。

①②のどちらかを選ぶこととし、字体は自由、必要があれば平仮名・片仮名や絵文字も可としました。応募資格は市内在住、在学、在勤の小学生以上、募集期間は、二月一日～三月二〇日としました。

初めての試みだったこともあり、どれだけ作品が集まるのか心配でもありましたが、結果、一六六の作品がそろいました。年齢層も小学生から九四歳までと幅広く、書道教室や学校のクラス・書道部単位での応募もいただきました。

審査は四月のはじめに行いました。上手なだけではなく、いろいろな形で表現された象山を取り上げたいという思いから、書家の先生のアドバイスもいただきつつ、当財団理事長と当館館長が審査を行いました。どの作品も素晴らしく、個性的な力作ぞろいで、審査は非常に難航しましたが、最優秀賞の「佐久間象山大賞」に輝いたのは、凛々しく端正な「象山」を

表現した中学生の作品でした。その他、「理事長賞」「館長賞」「ユニーク賞」の各賞に、小学生から大人までの二四名の作品が入選しました。

五月下旬、特別展の展示作業の傍らで、書道作品の展示作業も行われました。応募いただいたすべての作品が博物館二階廊下の壁にならぶと、「象山」「海舟書屋」の文字たちが壁一面を覆う、迫力ある展示になりました。

そして迎えた五月三十一日、特別展と書道展が開会しました。ありがたいことに、応募者の中には初日に会場下さった方もいらしたようです。会期中、多くのお客様が足を止め、作品に見入っていました。六月二八日(土)には、表彰式を開催しました。式には受賞者ほぼ全員がご出席下さり、ご家族や関係者の皆様にも多数ご参加いただきました。理事長、館長から表彰状と賞品をお渡しし、式は盛会のうちに終了しました。それから一週間後の七月六日、書道展は好評のうちに無事閉会を迎えることができました。

当館初の書道展でしたが、応募数も百を超え、来館者にも好評だったようです。応募者の方からは「また開催してほしい」というご意見もいただきました。今回の結果をふまえ、今後、さまざまなテーマで



表彰式会場の様子

開催していけるよう、前向きに検討していきたいと思っています。その時は、またの力作をお待ちいたしております。

最後になりますが、本書道展の企画、実施にあたり多くのご助力を賜った書家の小熊廣美先生、書道展に協賛・賞品を提供いただいたモザイクモール港北、特別展に協賛・賞品を提供いただいた株式会社三陽物産、そして作品を応募下さったすべての皆様に感謝申し上げます。

(小林 紀子)

企画展「蒔田の吉良氏―戦国まぼろしの蒔田城と姫君―」をふりかえって 創作歴史紙芝居「蒔田城さき姫ものがたり」の上演

七月一九日(土)～八月三十一日(日)の、夏休み期間中に開催した企画展「蒔田の吉良氏―戦国まぼろしの蒔田城と姫君―」には、おかげさまで沢山の皆様にお出でいただきました。ここでは企画展関連事業の一つであった紙芝居の上演についてご報告します。

戦国時代に吉良氏の城館があったとされる横浜市南区蒔田町の丘の上に建つ、横浜英和女学院中学高等学校の歴史部は、一九八五年と二〇〇六年に吉良氏について調べ、吉良頼康の妻・さき姫を主人公としたスクリーンドラマを制作しており、展覧会ではこのドラマをもとに紙芝居を作成し、同校歴史部員の皆さんに演じていただくこととなりました。

もともとスクリーンドラマは上演すると三十分近い内容を持ち、部員たちによって描かれた沢山のイラストが含まれていました。これを紙芝居にふさわしい二十分程度にまとめるため、物語からは



さき姫に扮した生徒・山田先生

いくつもの台詞を削ることとなりましたが、素敵なイラストのほとんどは使用することとしました。このような紙芝居作成にあたってご指導をいただいたのは、当博物館で日頃紙芝居を上演してくださる「なつかし亭」の岸本茂樹さんです。



「なつかし亭」岸本さん

岸本さんには、紙芝居を演じる歴史部の皆さんへの演技指導も行っていました。学校が夏休みに入る直前から七月にかけての計五回、学校のなかで部活動の時間に練習を行いました。練習には顧問の大橋先生・山田先生もご参加ください、最初はとまどって小さな声しか出ない生徒さんたちの前で、両先生が模範上演を行ってくださいました。先生たちのお励ましと岸本さんの柔らかく丁寧なご指導により、生徒の皆さんはメキメキと上達していったようです。また当初、複人数で一上演をと考えていましたが、生

徒自身で一人一上演、部員十人が全員一度ずつ演じることを決め、またさき姫に扮した生徒が拍子木を打つ生徒の後ろについて館内を回る呼び込みを実施することも決めました。

紙芝居の初演は八月二日(土)で、前日まで千葉県館山市での合宿だったにもかかわらず、十人の部員たちは元気に来館し、しっかりとした声で紙芝居を演じてくれました。以降、八月三日(日)・九日(土)・十日(日)・二三日(土)の一日に二公演を、みごとに演じきりました。上演日の三時からと二四日(日)には岸本茂樹さんの上演もあり、観覧者はのべ五八三人に上り、生徒たちのご家族や校長先生をはじめとする学校の先生方・学院OGの方々も観に来られて、それぞれ思い出話に興じたり、写真撮影をするなどにぎやかななかで紙芝居は無事に終了しました。展覧会のアンケートでは、「紙芝居がよかった」「展示と紙芝居とでより理解が深まった」などのご意見をいただいています。歴史部の皆さんが引き続き吉良氏



大橋先生



創作歴史紙芝居「蒔田城さき姫ものがたり」上演の様子

に対する研究を深め、蒔田の歴史を次世代の部員につないでいっていただけたら良いと感じています。

末尾になりましたが、上演してくださった歴史部の皆さん、博物館事業への参加をお許し下さった横浜英和女学院の伊藤校長先生、毎回の引率をしてくださった大橋先生・山田先生、ご指導頂いた岸本茂樹さんをはじめ、ご協力頂いた皆様にあらためて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

(阿諏訪青美)

横浜市歴史博物館「民俗に親しむ会」と「鶴見川流域のくらし」展（仮称）

横浜市歴史博物館では平成二十二年（二〇〇九）から市民とともに民俗のフィールドワーク（野外調査）を行いました。同年二月に四回連続の講座「民俗の見方、調べ方」を開催してその受講生から参加者を募り、「民俗に親しむ会」（以下「会」と略記）を組織したのです。五月に初めての会合を開き、鶴見川の源流から河口までのフィールドワークを行うことにしました。鶴見川は東京都町田市小山田町に端を発し、横浜市鶴見区末広町で東京湾に注ぐ長さ約四二kmの一級河川です。支流



フィールドワークの様子

町田市図師町の鶴見川新河道を見つめる会員。川の左側、緑色のフェンスの向こうに見える家の左の舗装路が旧河道跡。くねくねと曲がった鶴見川の河道をまっすぐにする治水工事は、川の周囲の景観を大きく変えてきました。

には恩田川や麻生川、早渕川や矢上川などがあり、流域を地図上で見ると動物のバクのかたちに似ていることから「バクの川」という愛称で親しまれています。対象地域を鶴見川にしたのは、当館が立地する横浜市中心部が流域に含まれ、多くの市民にとってなじみがあること、また歩くと二日と言われる源流から河口までの長さがフィールドワークを進めるにあたって適当であると考えたからです。

同年六月に町田市の源流域をスタートし、流域の社寺仏閣や路傍の石造物を見学したり、高台から丘陵と川が織成す地形を眺めたり、またかつての河道跡を確認したりしながら、だいたい月一回のペースで毎回一〇km余りを歩きました。自分の都合や体調により休むのは自由、退会も自由、無理せず楽しむというコンセプトで始めましたが、毎回さほどの欠席者もなく活動は進み、河口がある鶴見区末広町に到達したのは足かけ三年が過ぎた平成二十三年（二〇一一）六月でフィールドワークは計一九回を数えました。

当館では「ふるさと横浜探検」という市内域内外の文化財を訪ねる史跡散歩的な催事があり、参加者は配布されたテキストを見ながら当館学芸員や専門家による説明を受けてコースを歩きます。けれどもフィールドワークはそれぞれの興味や関心を広め、また自らが疑問に思ったこと

を考え、調べることが大切です。そのため配付資料は明治時代と現代の地形図、新編武蔵風土記稿の該当箇所などといった基礎資料程度に留め、原則説明はしませんでした。フィールドワークを重ねる中で、会員がそれぞれ調べて知識を得られればまず良し、それを共有し蓄積できればなお良し、そしてその蓄積を成果として広く発信できればさらに良し、と考えてきました。

当初の会員の目的は「参加すること」でしたが、回を重ねるごとに、祭礼・信仰・石造物・煉瓦・建築・橋などさまざまな興味・関心が生まれました。いくつもの石造物を見ることで使われている石材に興味を持ち、造った石工への関心を深めたり、またおしやもじが打ち付けられた小祠を見てかつて自分にもおしやもじがあったことを思い出し、それを調べた会員もいました。興味や関心の広がりとその間接的な相互の連帯感には想像した以上の深化がありました。

平成二十七年（二〇一五）一月三十一日、ちょうど開館二〇周年の日から開催される企画展「鶴見川流域のくらし」（仮題）は、会員がフィールドワークで調べた内容を活かして展示を構成します。「会」に参加した市民の蓄積とフィールドワークの成果をぜひご覧下さい。

（刈田 均）

ちよいと

ミュージアムショップたいむ Museum Shop Time

「あじろ編み バッグキット」新発売！

当博物館の体験学習でも人気のあじろ編み。小物入れ、縄文ポシェットのキットは既に当ショップで好評発売中ですが、八月よりバッグのキットが新登場！

こちらのキットは上級者向けになります。が、すでに小物入れやポシェットを作ったことのある方にはそれほど抵抗なく作れるのではないかと思います。制作にかかる時間は個人差があるかと思いますが、三時間から一日くらいが目安です。

もし、完成できない場合は、当博物館の体験学習室にお越しいただければ、スタッフがお手伝いいたしますので、ご安心ください。

ぜひ、完成したときの達成感を味わってみてください。

ちなみに・・・完成品も販売しております。こちらにはニス塗り加工が施されております。制作キットは一八〇〇円、完成品は三三〇〇円で販売しております。



▲あじろ編みバッグ（完成品）
1個 2,300円（税込）



▲あじろ編みバッグ制作キット
1セット 1,800円（税込）

都筑区制二〇周年記念 特別企画展

横浜市歴史博物館が所在する横浜市都筑区は、今年、区制二〇周年を迎えます。

区名の「都筑」は、古代からの「都筑郡」という地名を受け継ぐとともに、「これからのまちづくりが、新しい「都を筑く」という区民の総意で進むことを願って選定されました。そのことは、「ふるさと」と呼べるまちづくりを進めていくことで実現されてきました。



牡丹唐草文長頸瓶 一對(京セラ美術館所蔵)

九月一二日(金)から九月二八日(日)まで、区制二〇周年記念として都筑区が主催し、都筑区内に事業所を置いている京セラ株式会社の協力を得て、同社が所蔵する美術品を博物館で展覧しました。

「都筑」の二〇周年に合わせ、「ふるさとの情景」や「都の隆盛」を感じてもらおう

と、平山郁夫「平等院」、吉田善彦「山の辺新秋」など五点の日本画、中国の清代に製作された、特異な技法と様式をもつ乾隆ガラスのうち、牡丹唐草文長頸壺・山水楼閣文花瓶など二一件が展示されました。来館した人たちは貴重な美術品に見入っていました。

この展覧会と同時に、「東アジア文化都市2014・泉州市／光州広域市文化ウイークIN横浜」が開催され、中国の泉州市・韓国の光州市の様々な文物が展覧されました。来館者は横浜とは異なる文化諸相を感じ取っていました。

ボランティア活動紹介 遺物洗浄

博物館のボランティア活動には、遺跡ガイドボランティアの他に「活動支援ボランティア」があり、現在五二名の方が活動されています。それぞれの方の興味関心やスケジュールに合わせ、博物館と横浜都市発展記念館・ユーラシア文化館で開催するいろいろな行事や体験学習、ワークショップなどのお手伝いをしていただいています。

七月からは初めての試みとして、週二回「遺物洗浄」の活動を行っています。貝塚から出土した土や骨などの遺物についた泥をひとつひとつ丁寧に落とし、乾燥させたあと再び収納する作業です。



遺物に直接触れることができる貴重な機会ではあるものの、あまり涼しくない水洗室での地道な水仕事という、決して楽ではない作業ですから、一体どれくらいボランティアさんに関心を持っていただけるか不安でしたが、嬉しいことに多くの方のご参加をいただき、作業も順調に進んでいます。

遺物洗浄の活動を来年も行うかは今のところ未定ですが、活動支援ボランティアは毎年一月末から三月上旬頃に募集しています。興味を持っていただけならその頃にぜひ、博物館のウェブサイトをチェックしてみてください。

神奈川フィルハーモニーのコンサート

横浜市歴史博物館では年に二回、博物館の入り口正面(エントランスホール)でコンサートを行っています。



プロの演奏を身近で堅苦しくなく聞けるよう、一度も足を踏み入れたことがない皆さんが博物館に入るきっかけになるよう、十余年前から行ってきた催しです。横浜市内には若い人口が多い地域らしく、小さな子供連れの方も多数来館されています。

この六月のコンサートでは、神奈川フィルハーモニー管弦楽団に出演していただきました。長い博物館コンサートの中のひとつの楽団にお願いをしたことはありませんでした。

伝統ある神奈川フィルで、なおかつ普段から一緒に演奏されているメンバーなので、チームワークが抜群です。フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルンの五重奏でしたが、各々ソロの楽曲も披露され、一つ一つの楽器の音色も聞き分けられる濃密な四五分間でした。

毎回プロで活躍されている方をお呼びしているコンサート。お出での際は、ぜひ博物館の展示もご覧になってください。より多くの皆様の来館をお待ちしております。

